
僕と幽霊と・・・

tanaka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幽霊と・・・

【コード】

N8105Y

【作者名】

t a n a k a

【あらすじ】

靈感の強い主人公と幽霊の女性。二人とその周りのラブコメです。後々、ややハーレムぎみになります。

一話 幽霊に告白されて・・・

僕の家系は昔から靈感が強かったらしい。そしてその家系の人間である僕も同じよう

に靈感が強かった。だから幽霊なんて昔から頻繁に目にしてきたわけ

で、今更、幽霊を見ても驚きはしないし、恐怖に怯えることもない。

「えーと、適当にお経でも唱えれば成仏するかな」

「ええっ!? 私の存在を感知してくれたのは嬉しいけど、いきなり成仏させようとす

るのはどうなの!？」

「お経が書いてある紙、何処にやったかな？」

「無視っ!? ねえ! 無視してるの!? 無視するなんて人としてどうなの!？」

耳元でわーわーと、叫ぶ幽霊。無視だなんて、とんでもない。僕は善意で目の前の幽

霊を成仏させてあげようとしているのに。

「……………何か僕に用でもあるんですか？」

面倒だけど……………凄く面倒だけど、一応話しくらいは聞いてあげよう。

僕個人の意見としては、今すぐにでも成仏させたいんだけどね。

ああ、本当に面倒だよ。

「なんか、物凄く面倒な奴って思われてる気がする……………」

「……………気のせいですよ」

「ならいいけど」

「それで、あなたは何のためにこの家に来たんですか？」

もしかして、何の目的もなくこの家に来たとかじゃないだろうね。

幽霊なんだから、

それなりの理由があってこの場所に来ているんでしょ？

「え？　もしかして美少女幽霊の私のことが気になっちゃう感じかな？」

「よし。お経を探そう」

この人は特に目的もなさそうだ。こういう手合いは、さっさと成仏させるに限る。

「そ、そんなこと言わないでえ！　私が悪かったから成仏させようとしなさい！」

部屋から出て行こうとする僕の足にしがみついてくる彼女。

そんな風に足にしがみつかれると邪魔なんですけど。

「ちゃんと話すから！　ちゃんと理由を話すから！」

「……分かりました。では、理由を話して下さい」
足を止め、彼女の言葉を待つ。

「あのね、私恋をしたいのです！」

「……そういうのは天国でやってください」

そもそも恋をしたいというのは、あなたがここに居るのは関係ないですよ？

死んだ人同士で、天国で楽しく恋でもしていればいいじゃないですか。

「違うの！　私はこつちの世界で恋をしたいの！」

「恋をしたいと言っても、あなたもうすでに死んでいるじゃないですか」

死んで幽霊になってしまった以上、この世界で恋をすることは出来ないうら。

可能性があるとするれば、同じくまだこの世界に残っている幽霊とだけ……

「　だから私は、あなたに会いに来たの！」

「何でそこで僕が出てくるんですか？」

ある程度霊感が強いといっても、彼女に恋をさせるような能力は持っていない。

正直、頼る相手を間違えていると思う。僕に出来るのは、こうし

て会話をしてあげる
ことくらいなのだから。

「だって私は、あなたと恋をしたいのだから！」
ババーンと、まるで効果音でも付きそうな勢いで、とんでもない
ことを言う彼女。

僕と恋をしたい？ この幽霊は一体、なにを馬鹿なことを言っ
ているのだろうか。

「お断りします」

「な、何で！？ そんなすぐに拒否しなくてもいいじゃない！ 自
慢じゃないけど、私
なかなか可愛いんだよ？」

「そういう問題じゃないでしょ……」

可愛いとか、可愛くないとかそういう問題ではなくて、僕は生き
ていてあなたは死ん

でいるんですよ。それで、どうやって恋をしろと言っただろうか？
「ぶー、問題ないはずだよ！ だって、あなたはこっら辺で一番靈
感が強いんだから」

「それはそうかもしれませんが……」

「こうして私と会話も出来てるし、何より触れることだって出来る
んだよ！」

僕の手を取り、自身の身体に触れさせる。

「な、何をして　っ!？」

「ね……私の身体の温もりが分かるでしょ？　ここまで分かる人は、
なかなかいないん
だよ？　だからお願いだから私と　」

半分、涙目になりながら僕にお願いをしてくる彼女。一体、何が
彼女をここまでさせ

ているのだろうか？　僕には分からないし、知る必要もないだろう。

ただ一つ分かること。それは『恋』というのが彼女をこの世界に
留まらせている理由

なんだろうということだけだ。

「えっと、あなたは……」

「……渚だよ。倉科渚」

「じゃあ倉科さん。僕とあなたは今日が初対面なんですよ？ それなのに、いきなり僕

と恋がしたい。だなんて言われても困ります」

確かに、初対面で一目惚れというのは存在はするけど、倉科さんの場合は明らかに違う。

一目惚れとは違う理由で僕と恋をしたがっている。

「あなたにとつては初対面かもわからないけど、私にとっては違うんだよ。ずっと前から

あなたの……輝くんのこと知っているんだよ」

僕は知らなくて、倉科さんは知っている。それってもしかして軽いストーカーの類ではないだろうか？

「ストーカーって言うのはちょっと失礼だね。恋する乙女と言って欲しいわ」

「恋する乙女って……」

恋をしていたら、何をやってもいいというのだろうか？ それに倉科さんが乙女って

実際の年齢は知らないが、見た目で判断しても乙女って年齢じゃないだろう。

恋する女性つてところだろ。

「今、すっごい私をバカにしなかった？」

「そんなことはないですよ」

死んでいる相手とはいえ、僕が年上の女性を馬鹿にするとはいいますか？

「……目が笑ってる。やっぱり私をバカにしてたでしょ！」

「気のせいですってば」

そこまで表情に出るほどバカにしてた覚えはない、かな？

「そんな年上のお姉さんを敬うことの出来ない輝くんは、罰として私と付き合ってもらいます！」

「罰としてって……それでいいんですか？」

「そんな理由で付き合うのもおかしいと思うけどね。」

「罰でもなんでもいいの！ 輝くんが私と付き合ってくれるならいいの！」

「ですから、いきなり付き合うというのは……」

「どうしてそこまで深く考えるのかな？ 別にそんなに難しいことは言っていないんだけどな」

「難しいすぎるでしょ……」

初めて合った人？ といきなり付き合うのは難しいことですよ。

「もう……ほんとに輝くんは我儘なんだから。そこまで言うのなら、まずはお友達から」

初めましょ」

我儘なのは、あなたの方ですけどね。まあ、でも友達からなら僕も構わないかな。

「分かりました。まずは友達から始めましよう」

幽霊が友達っていうのも悪くはないんじゃないかな。

「うん。まずはお友達からだね」

友達から、というのでどうやら納得をしてくれたようだ。まずは相手のことを知るた

めに友達から始めるのが一番いいだろう。

「えへへ……よろしくね。輝くん！」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

差し出された手を握り握手をす　っ！？

「うわっ！？」

「ふ、ふ、ふ……引つか掛かったわね」

握手をした瞬間、倉科さんに引っ張られ彼女の方へと倒れ込んでしまう。っーか、僕

は倉科さんの何に引つか掛かったというのだろうか？ 別に騙されるようなことをされてはいないはずなんだけどね。

と、そんなことより、

「何をしてるんですか……」

倉科さんの行動に対して文句を言わないといけない。いきなり引つ張られると驚くし、

危ないからね。だというのに

「うんうん、やっぱり人に触れられるっていうのはいいもんだね」

まったく反省もせず、人に触れる喜びを感じている倉科さん。

はあ……そこまで嬉しそうな顔をさせてしまったら、文句を言いくくなってしまうじゃないか。

「はあ……仕方ない、か」

「ん？ どうしたの？」

「何でもないですよ……」

ええ、本当に何でもないですよ。あなたに文句を言いたかったとか、そんなことは欠片もないですよ？

「変な輝くん」

一番変なのは倉科さん、あなたですよ。

「ただいま帰りました」

「誰か帰ってきたみたいだね」

「この声は妹の沙羅ですよ」

僕の妹の沙羅。彼女も僕と同じように靈感が強い。だから倉科さんを認識することも

会話することも出来るだろう。

倉科さんが友達を作りたいというだけなら、沙羅を紹介してあげてただけどね。

残念ながら、倉科さんの目的は違ったんだよね。

「お兄様。ただいま帰りまし」

あれ？ 沙羅が僕を見た瞬間、石のように固まってしまった。

「さ、沙羅……？」

「……お、お兄様？ そ、その方は……？」

身体をプルプルと震わせながら、倉科さんを指さす。

沙羅。幽霊とはいえ、相手を指さすのはどうかと思うよ。

「は〜い 輝くんの妹さんの沙羅ちゃんだね。私は倉科渚だよ」

「あ、どうもお兄様の妹の沙羅です……って、そうじゃなくて！

あ、ああ、あなたは

わたしのお兄様と何をしているのですか！？」

「沙羅。何を言っているんだ？ 僕達は何もしていないぞ」

「お兄様！ わたし、嘘は嫌いです。ご自身の今の姿を見ても、お兄様は何もしていない

いと言い切れるのですか？」

「僕の今の姿……？」

いや、ごく普通の姿のはず……じゃあないね。忘れてたけど、倉科さんに引つ張られて

て彼女に覆いかぶさるように倒れていたんだっけか。

確かにこの姿は、何もしていないようには見えないわな。

「お兄様。丁寧な説明をお願いしてもよろしいですか？」

鬼のような形相で僕に説明を求めてくる沙羅。これは真面目に答えないと、僕が殺されてしまいそうだ。

「あ、あんな沙羅……これには深い理由があっただな」

倉科さんのことを説明しなければいけないのは分かるが、どこまで話していいのか分

からない。僕と恋をしたいとか、そういった件は説明出来ないし、かと言ってあまり説

明を省略すると沙羅に怒られそうだし……

「輝くん。全てお姉さんの任せなさい」

「倉科さん……」

物凄く嫌な予感がする。この人は、言わなくてもいい余計なことを沙羅に言ってしまう
いそいだ。

「いえ、ここは僕が」

「あのね沙羅ちゃん。私とお兄さんは恋人同士なのよ」

「「な　っ!?!?」」

やりやがった。僕が穏便に済ませようとしていたのに、勝手に爆弾発言をしたよ。

しかも微妙に捏造されてるし。

「お、おお、お兄様……?」

ま、拙い。沙羅が本気で怒っている。今更、倉科さんの嘘だと言っても信じてもらえないだろう。これはもしかしたら、骨の一本や二本は覚悟した方がいいかもしれない。

「まあ、半分冗談で今はお友達の関係なんだけど……って聞いてないか」

「そうですね。ほんと、とんでもないことを言ってくれましたよ」

「でも、輝くんと恋人関係になりたいってのは、私の本心だよ?」

「……そう、ですか」

「うん」

眩しいくらいの笑みを浮かべる倉科さん。どうして僕なのだろうか？　僕では彼女の

期待に応えられないと思うんだけど……

「お兄様っ！　わたしは、その女も交際も認めませんからね！」

「い、痛いっ！　沙羅、痛いから殴るのは止めてくれ！」

「バカッ！　お兄様のバカッ！　わたしという妹が居ながら他の女に手を出すだなんて

最低です！」

恋がしたいと言って、僕のところ転がりこんできた幽霊の倉科渚さん。

とりあえず友達から始めることにしたけどこれから先、不安しかないよ。

まあでも、とりあえずは 沙羅の攻撃を耐えることに集中する
としようかね。

「お兄様のバカ ツ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8105y/>

僕と幽霊と・・・

2011年11月24日00時56分発行